

一九六〇年代のカリフォルニア州における農業労働者ストライキと カトリック教会

中 川 正 紀

はじめに

一九六五年九月、米国カリフォルニア州カーン郡の小さな町デラノで賃金引上げ等を求めた葡萄摘み労働者ストライキが起こった。このストはメキシコ系の「全国農業労働者連合」(以下NFWAと略記、会長セサル・チャベス)とフィリピン系のAFFLCIO傘下「農業労働者組織委員会」(以下AWOCと略記、会長ラリー・イットリオンク)の二つの労働組合の連帯によるもので、全国的な葡萄ボーイコットにまで拡大し米国各地からの人種・民族、階級、宗教の違いを越えた広い範囲の支援を集めたが、経営者側であるデラノの全ての葡萄栽培業者との契約締結までに五年近くを要した。⁽¹⁾

本論文では、デラノ・ストライキの初期の経過をたどりながら、カトリック教会のストに対する態度の変化に注目する。スト参加労働者の大半はカトリックだったが、ストを先に支援したのはプロテスタントの方であった。しかし、暫くして他宗派の教団が加わり、プロテスタント・カトリック・ユダヤの三大宗派の支援ネットワークが確立される。

従来、デラノ・ストライキにおけるカトリック教会の活動に関する研究は筆者の知るところでは、P・H・マクナマラの博士論文のみである。⁽²⁾それは、スト当時カトリック教会は献金主の大半を占める栽培業者(ユーゴスラビア系やイタリア系が主体)の意向に影響され、プロテスタントの行動に遅れを取ることが多く、スト支持者

としての活躍は比較的目立たなかったためと思われる。

一方、当時出版されたドキュメンタリー風の著作物は、莫大な量に及び、スト側・スト反対者側がマスコミを利用してプロパガンダ合戦を盛んに行ったことがその一因である。

マクナマラは、六五年十二月の全国レベル組織の神父によるスト支持の声明、六六年三月の加州教会組織の態度の中立からスト支持への移行、そして六六年三月から四月にかけてのスト農業労働者の巡礼行進という一連の出来事が、その後のカトリックの草の根的な支持の誘因となったと解釈するが、三つの出来事間の因果関係には殆ど触れていない⁽³⁾。そのため、全国レベルから加州組織の上層部へ、さらに草の根レベルという、カトリック聖職者のスト支持への段階的移行の経路が不明瞭で、あたかも三つの出来事が独立して起こったような印象を与える。

しかし、実際にはこれらの出来事は密接に関係し合っ
て起こったのであり、以下の理由から、六五年十二月の
声明と、その前後のスト、ボイコットに対する聖職者の
支援活動とその効果が次第にカトリック州教会組織に自

らの姿勢の再考を促したことにもっと注目すべきなのである。スト当初のカトリック教会の立場は、全国組織(州外組織)レベルの支持、州組織の中立、地元司教区の中立とに分かれていた。そして、特に州レベルでは下位の神父らが個人としてスト支援の態度を早くから示し、上位聖職者の承認が神父たちにとっての大きな課題であった。その意味で州カトリック教会組織全体のスト支持の表明はデラノ・ストの大きな出来事の一つであり、それを中心に前後の事件との関連を検討することで、デラノ・ストにおいてカトリック教会がスト支持に傾いていく過程に寄与する諸要因どうしの連関がさらに明確にできるものと確信する。

以上の先行研究に対する批判的考察を踏まえて、本稿は、州レベルおよび地元司教区のカトリック教会が最初の時期はストに中立の立場を取らざるを得なかった原因を探り、にもかかわらずスト開始半年後に州レベルの組織が結局はスト支持側に回るに至るまでの、スト参加者側そして州外部の宗教組織・指導者側からの働きかけの形態とその影響力を検討しようとするものである。

I カトリック教会による支援の遅れの根拠

加州のカトリック教会組織は、大司教の下に司教、その下に司祭、という僧位で構成される。大司教、司教がそれぞれ管轄する大司教区(大都市に存在することが多い)、司教区の下位区分が教区と呼ばれ、主任司祭が管轄する単位である。当時、加州には二つの大司教区(うち一区ではローマ教皇に次ぐ最高の行政職である枢機卿が大司教を兼ねていた)と六つの司教区があった。デラノ・スト当初、加州でも個人レベルではNFWAの主張を支持する神父・カトリック教徒もいたが、州レベル・地元司教区・地元教区のカトリック教会組織は公式には以下に述べる三つの理由で中立の立場を表明していた。そのため、特に地元のモンテレー・フレズノ司教区の司教A・J・ウィリンガーの直属の神父たちはプロテスタント聖職者ほど早い時期にストに関わる⁽⁴⁾ことが表立ってできないでいたのである。

(1)メキシコ系に対するカトリック教会組織の慣行的態度
マクナマラは、カトリシズム、同化、チカノ(メキシコ

コ系の別称)運動の三者の関係について、米国南西部地域で最大規模の大司教区ロサンゼルスのカトリック教会を例にとって論じている。彼によれば、今世紀初頭、第一次世界大戦期のアメリカニゼーション運動に歩調を合わせて、プロテスタントとカトリックの聖職者たちは、増加傾向のメキシコ人に対し、市民権獲得のための教室や語学学校の設立などにより、同化促進を試みた。カトリックの場合、メキシコ系移民を同化させる努力はプロテスタントの伝道活動から保護することと結びつき、カトリシズムの保持は何よりも「よい市民」となることを推進し、それは新たな祖国米国への忠誠心を生み出すことを通じて可能であると見なされるようになった⁽⁵⁾。

一九六〇年代になると、この愛国・同化主義が当時の教会が主張していた「社会経済的問題の平和的解決方法の尊重」と結びつく。同化の過程は教会のいう「ラディカルな」抗議を伴う必要はなく、それどころか教会による宗教組織はメキシコ系のカトリックを「破壊的な」集団から保護しなくてはならない、と考えられるようになる。そして、カトリシズムによる「アメリカ市民化」によって、メキシコ系はカトリック教会の考える現代の社

会悪（プロテスタンティズム、ボルシェビズム、アナキズム、コミュニズム、犯罪、教義上・道徳上の相対主義）から守られることとなると考えられた。そもそも、チカノ運動は米国内にみられる同化主義とチカノの被抑圧の状況を抗議対象にしており、この点でロサンゼルス大司教区の同化主義の方針と真っ向から対立するとマクナマラはいう。ゆえに結論としてマクナマラは、カトリック教会はチカノ運動に中立の立場を取り続けるであろうことを示唆している。⁽⁶⁾

ロサンゼルス大司教区では、一九四八年から六九年まで伝統的な教会寄りの立場を取るマッキンタイアー枢機卿が大司教の座にあったため、チカノ運動に対する態度⁽⁷⁾に関しロサンゼルス大司教区が加州の他の司教区に及ぼす影響は大きかったと思われる。ここで、デラノ・ストの目標はチカノ運動の目標とは異なっていたが、スト初期には教会によって両者が同一視されていた可能性が大きかったことを付け加えておかねばなるまい。

(2) 栽培業者側の農業労働者組織化に対する反発

カトリックにはプロテスタント系の「移動労働者担当

牧師団」(the Migrant Ministry)⁽⁸⁾のような、農業労働者の組織化に直接関わる組織が長期にわたり存在しなかった。せいぜい、一九五〇年から六二年に活動の見られた「布教団」(the Spanish Mission Band)が、農業労働者の組織化に携わった唯一の組織であったと言える。

「布教団」について詳説すれば、一九五〇年サンフランシスコ大司教区の神父四人が「貧民担当の聖職者」の活動許可を大司教のJ・J・ミティに要請した。「布教団」に任命された神父の中、マッカラウ、マクダネル両神父はチャベスやのちのNFWA女性副会長ドローレス・ウエルタと親交を得る。神父たちは、教会活動の手が届きにくいブラセロの教化に力を注いだ。ブラセロとは、当時米墨両政府間の協定により米国に出稼ぎに来ていた労働者のことである。ブラセロは賃金や労働環境などの点で劣悪な状況におかれ、彼らの雇用がひいては国内労働者の低賃金・失業やスト破りの導入を招いていた。マッカラウは最初のうち、こうした構造的問題に気づかず、ブラセロに「社会正義に関する教会の教義を伝えること」だけが自らの任務と確信していた。だが、その後七年間の活動を通して次第に、ブラセロ問題の解決

は国内労働者の組織化にあることに気づき始める。そこで、雇用者側との団体交渉による農業労働者問題の解決をめざして、組織化活動に着手するのである。しかし、ここに至って栽培業者の「布教団」に対する怒りは最高潮に達し、教会の上層部に圧力がかけられ、とうとう六二年に「布教団」はコミュニストの「汚名」を着せられて壊滅されてしまう。さらに、四人の神父とも今後決して農業労働者の組織化に関係することのないよう厳命された。ここにみられる反共産主義には、当時の社会的風潮の中になお残っていたマッカーシイズムの影響があったであろうことも指摘できよう。また、デラノ・ストとの関連で、この組織の壊滅に地元教区のウィリンガー司教も関わっていたことに注目すべきであろう。⁽⁹⁾その後デラノ・スト開始までの間、カトリック教会は組織として公式に農業労働者の組織化に関わることはなかったのである。

(3)地元カトリック教会とストライキ参加者の宗教的慣行
デラノの神父たちはストの問題に干渉しないように、主にカトリックである栽培業者側から事あるごとに圧力

をかけられていた。教区民の大部分はメキシコ系であったが、カトリック教会への財政援助の大半はユーゴスラビア系やイタリア系の栽培業者を含むアングロ(ここではヒスパニック以外の白人に対する呼称)からであったため、地元教区のカトリック教会は栽培業者の圧力にはほとんど屈してしまっていた。⁽¹⁰⁾

そうした教会と農業労働者との関係についてのチャベスの談話によれば、普段、農業労働者のごく僅かしか教会のミサに定期的には出席しておらず、大きな変化でもない限り教会には関わらなかったという。当時のカトリック教会にメキシコ系の司教・神父が殆どいなかったという人種民族的な要因⁽¹¹⁾と、前述のように教会が貧者にあまり関心を持っていなかったという階級的な要因とが絡み合っており、教会はメキシコ系にとって疎遠な存在であった。他方、フィリピン系は基本的に移動労働者であったため、教会に礼拝に行くという時間的余裕はなかったたのである。それゆえ、労働者のカトリック信仰は教会から離れた形で、主として各家庭に代々伝わる伝承的なものであったと考えられる。この形態は、同時代のラテンアメリカの農村社会でも広く見られた現象であった。⁽¹²⁾

II カトリック神父の個人的支援活動と全国

レベルでの対応

カトリックによる最初のスト支援は個人レベルで、サクラメント出身のK・ケニー神父と、ウッドランド出身のA・ミীগー神父によった。二人のピケ参加の動機はプロテスタントへの対抗意識にあったが、六五年十月二日にチャベスを伴って自家用飛行機でデラノ上空を飛び、葡萄園に働くスト破りたちにストへの参加を拡声器で呼びかけたことが有名である。⁽¹³⁾

二日後の二四日、デラノのエリントン・パークでスト中の農業労働者のミサが開催された。神の恵みを感謝し今後の闘争における勇気と助力を求めるため、四百人以上の農業労働者のほかに、ストを支援するカトリック信者その他が出席した。農業労働と同じく肉体労働に属する大工を生業としていたセント・ジョゼフに敬意を表して、フレズノのカトリック教会に所属するE・ネリー神父とグアダルーベ連盟のチャプリンが儀式の進行役を務めた。ネリーは説教で労働者たちに、暴力を避け思いやりの態度を持つように促した。出席した他の聖職者に、

A・ソート神父とサン・ノゼのT・フライ神父がいた。⁽¹⁴⁾以上、ストの初期の頃のミサはカトリック神父が中心となっていていた。

六五年十月二七日号の組合機関紙『エル・マルクリアイド』には全国カトリック農村生活協議会ワシントンDC支部の理事J・L・ヴィザード神父からの支援の手紙(十月七日付け)が、続いて十一月十日号にはワシントンDCのV・サランディニ神父からの支援の手紙が掲載され、全国レベルのカトリック教会関係の組織の代表者や州外の神父からスト支持・支援の声が組合に寄せられていたことがわかる。この支持が行動の形で表されたのが、十二月十日のヴィザード神父の個人声明と、十二月十四日の超宗派的教会組織「宗教問題委員会」のデラノ訪問とそれに基づく声明であった。前者の声明はデラノ地域のカトリック教会の姿勢に言及し、スト参加者たちは教会から精神的援助を期待する権利があるのにそうした援助を受けていないことを批判した。一方、後者はスト参加者たちに対し「自らの要求が認められるまで」ストを続けるよう勧め、ブラウン州知事と州議会に団体交渉権を保障する立法の制定ならびに、ジョンソン大統領

領と米国議会に全国労働関係法(以下NLRAと略記)の適用を農業労働者にまで拡大する連邦法の制定を、要求したのである。⁽¹⁵⁾

さて、ユダヤ教のスト支持に関する入手資料は僅かで、六六年一月五日の改革ラビ西部連合代表者会議(CWAR R)の特別決議の可決が教会独自の動向の一例として挙げられる。この決議で、ストの支持と正義を求める闘争における農業労働者への支援が全米のユダヤ教徒の寄付とボイコットでの援助の形で行われることが約束された。それまでもユダヤ教牧師たちは、プロテスタントやカトリックたちとともにデラノでのピケラインに姿を見せていたのである。⁽¹⁶⁾

III ボイコットにおける教会の支援

(1) 販路妨害作戦

NFWAによる全国的デラノ産葡萄ボイコット運動は六五年十二月末に開始されるが、十月には既に小規模な運動が行われていた。その頃にはサンフランシスコのシェンリー有限会社の建物に対するピケが金曜日午後の恒例となっており、ある週にはスト組合、メキシコ系、公

民権運動家たち五十人以上の参加があったという。シェンリーの経営陣は、自社には黒人の副会長がいることを根拠に会社が人種差別をしていないと反論した。ピケ隊は自分たちは人種差別を問題にしているのではなく、マインリティ集団に属する農業労働者への最低賃金・団体交渉権に関する法律的保护の適用を反対している経営者に抗議しているのだ、と答えた。⁽¹⁷⁾このように、少なくとも経営者側にはデラノ・ストを公民権運動と同一視してスト側からの攻撃をかわそうという意図が見受けられた。これについては、後の箇所でも改めて検討を加えたい。

続いて十一月十七日、サンフランシスコの埠頭で一、二五〇箱の新鮮なデラノ産葡萄(七千ドル相当)がハワイやアジアに向けて船積みされている定期船に、NFWAとAWOCのスト参加者らがピケを張った。ハワイで農業労働者の組織化に協力した経験のある国際港湾労働者・倉庫業者組合(ILWU)の労働者約五十名は葡萄の船積みを拒否することで支援を行い、ティームスターズ・ユニオンもピケ・ラインを越えた葡萄の運搬を拒んだ。また、船員らはもし船がスト破り労働者の摘んだ葡萄を輸送するならば、ストを起こすぞと使用者側に迫ま

ったのである。さらに、二八日には葡萄の船積み阻止行動はオークランドやロサンゼルスにまで及んだ。オークランドでは、ディ・ジョルジオ果物会社(葡萄二、五〇箱)の損失を出した。その一方で、スト地域の葡萄園では摘み残された果実が熟れ過ぎ、急遽、食卓用の葡萄を醸造用として出荷する業者もいた。⁽¹⁸⁾以上のように、葡萄園のピケ活動に、輸送経路を遮断する小規模な妨害戦術が加わって、ある程度の打撃を栽培業者側に負わせることが可能となったのである。

(2) 全国的規模のボイコットと教会関係者の支援

十二月十五日サンフランシスコのAFL-CIO年次大会でデラノ・ストライキを支持する決議文が採択された後、チャベスのボイコット計画が支持を受けた。翌日「全米合同自動車工組合(UAW)会長W・P・ルーサーがデラノにやってきて、月額四千ドルの寄付金の提供をストの勝利まで続けることを約束した。⁽¹⁹⁾

チャベスはボイコットの準備段階でボイコット・センタールとなる全国十三の主要都市を選び、ボイコット要員を派遣した。大抵の都市で、スタッフたちは労働組合の

地方支部に行き、部屋、食事、事務所、電話や可能な限りの援助を頼んだ。パンフの配布や、隣人・友人・教会・店舗への電話により、ボイコットへの援助を呼びかける人々が全国で約一万人集まったのである。例えば、ニューヨークでは運送労働者組合(TWU)に依頼して百万部のボイコットのパンフを印刷し市の地下鉄で配布してもらった。この背後には、六十年代に入ってから消費者運動の盛上りと多様化および、それに対する行政側の積極的な対応があったことが指摘できる。アメリカ消費者連合会(CFA)の急速な発展、ラルフ・ネーダーを中心とする法的側面からの消費者運動、ケネディ大統領による消費者の保護と権利に関する政策などがそれである。こうして、米国社会一般に消費者ボイコット運動を抵抗なく受け入れる素地が既に形成されていた。また、製品積出し地であるデラノではNFWAが、町を出て全国の市場に向かう食卓用葡萄積載貨物の輸送妨害を企てた。⁽²⁰⁾

ボイコットの最初の対象となった大企業体は、ディ・ジョルジオ社(デラノでの農地所有面積四千六百エーカー)とシェンリー社(三千五百エーカー)であった。前

者は年間歳入二億三千七百万ドルのうちの僅か十%未満が農業収入で、後者も年間売上げ五億ドル(大半が蒸留酒による)のうちのごく僅かが農業によるものであったので、農業経営のために消費者への販売活動を犠牲にはできなかった。また、両社とも全国的な販路を通じて製品を販売し他業種の労働組合と何十もの契約を持つため、NFWAに対して傲慢に振舞うことで契約関係が危うくなっても構わないだけの経済的余裕は両社にはなかったのである。以上の理由で、ボイコットの影響を受け易くしかも全国的に名を知られた経営体として二社が対象に選ばれたのである。⁽²¹⁾

翌年一月上旬、チャベスは全国向けテレビ放送の記者会見で、葡萄ボイコットと、葡萄園の刈り込み阻止が目的のピケ活動の計画について語った。こうしたマスコミ利用作戦は、デラノ・ストを通じて随時見られる。また、六五年十二月から六六年二月にかけて米墨の雑誌やカトリック系の雑誌がこぞってデラノ・ストを取り上げた。六六年一月二六日号の『エル・マルクリアード』は、聖職者と学生の大半がボイコット運動グループを支援する目的で全米の諸都市に出かけたためデラノの農地でのピ

ケラインから姿を消していることを伝えるほか、一月中旬から下旬にかけての全米各大都市でのボイコットの進展ぶりを報じている。なかでもシカゴとピッツバーグでは、カトリック教会とプロテスタント系諸教派がボイコットの推進に関与していたことは注目に値する。⁽²²⁾

二月二八日号と三月十七日号はそれぞれ、ボイコットの普及とボイコットへの支援の状況を報道している。ここでは、教会の活動を対象としている本稿のねらいに即して、教会からの支援への言及に止める。前者は、オクラホマ・シティでカトリック教会の大司教がボイコット支援活動の大半を引き受け、ヒューストンではボイコットに対する最初の支援が金銭の形でカトリック教会から寄せられたことを報じている。そして、後者はシカゴで大司教委員会と地元の諸組合がボイコットに尽力し、テキサス東部では土地の大司教委員会が支援を寄せテキサス州の何千人ものメキシコ系が「禁酒の誓いをした」ことを報じている。⁽²³⁾

このほか、ボイコットへの直接的支援ではないが、聖職者たちによるスト支持・支援行動が見られた。一月、エル・パソ(テキサス州)の司教S・M・メツガーがデ

ラノ・ストへの懸念を表明し、テキサス州民への嘆願として、教会員 (Jiss Pock) がデラノ栽培業者のもとでスト破りをしないよう呼びかけた。二月頃、全国カトリック農村生活協議会はスト参加者の賃上げと契約の要求を支持する決議を満場一致で採択した。⁽²⁴⁾

このようなカリフォルニア州外部での聖職者、特にカトリック教会の上層部がストライキ、ボイコットを支援する動きによって、スト開始から中立の立場を固辞してきた加州カトリック教会組織はとうとうストに対して肯定的な方向に動き出すことになる。

IV

移動労働者に関する全米小委員会の公聴会

——加州カトリック教会組織の支持表明——

移動労働者に関する連邦上院委員会は、三月中旬に「ストを全米的な問題にまで浮上させNLR Aを農業労働者にも適用させる道を開く目的で」公聴会の開催（十四日サクラメント、十五日ヴィサリア、十六日デラノ）を決定する。小委員会議長H・ウィリアムズ（ニュージャージー州選出の民主党上院議員）は同時に調査団を編成し、公聴会の開催地への訪問に合わせ各地域の労

働者キャンプの現状などを視察する計画も立てた。実際、三日目のデラノ訪問ではスト参加者たちを訪ね、激励の言葉を贈り農業労働者向けの新たな立法の制定を約束したのである。⁽²⁵⁾

公聴会の証言者には、E・C・ヘバット・ブラウン・シニア州知事（一九五九―六七年在職）、AFL-CIO会長カーチャー、チャベス、イットリリング、デラノ市長C・ラウダー、葡萄栽培業者M・ザニノビチ、ストックトン司教区の司教H・ドノホー、「加州移動労働者担当牧師団」（以下CM Mと略記）理事W・C・ハートマヤー、そしてD・ウエルタ等がいた。端的に言って、公聴会の最大の成果は、J・C・ジェンキンズによれば「デラノ・ストに正当性を与えた点と二年目の抗議運動の舞台設定をした点」であった。⁽²⁶⁾

教会関係者の代表陳述は、三日目の十六日に集中した。ドノホー司教は、州教会の枢機卿、大司教、司教六人を代表した。「我々八名は、この問題が解決されるべき倫理的枠組みに対する我々の見解を正當に示すものとして以下の声明を受け入れることに意見が一致している。それ故、同声明は直接に、あるいははっきりと限定してデ

ラノに向けられたものではなく、むしろ倫理的問題および、その倫理的問題が解決されるべき枠組みとしての農業労働者問題に向けられたものである。それが同声明の全体的性格である。⁽²⁷⁾同司教は、局所的なストライキを支持するのではなく、全世界的規模での農業労働者問題の解決を試みようとする意志を表すものとして同声明を位置づけている。そこに、ストへの支持をあまり明確にしないことで、加州の栽培業者からの攻撃をかわそうとする聖職者たちの意図が感じられる。

声明の冒頭で、司教は、六二年十月十一日から六五年十二月八日まで開催されていた第二バチカン公会議の公文書『現代世界憲章』の中の移動季節労働者に対する差別的撤廃と保護措置の必要性を述べた部分を読み上げ、その内容を敷衍して栽培業者に組合権が存するのと同様に、農業労働者にも組合団結権があるべきことを主張した。組合団結権を含む労働三権の獲得はNLRAの農業労働者への適用により可能となるのであり、このことを州カトリック教会の権威者たちが支持したことは農業労働者問題の「解決に向けての大きな一歩」であると発表したのである。⁽²⁸⁾

このように、州カトリック教会組織全体がデラノ・スト支持を明言したとはとれないにせよ、農業労働者問題を経済的問題ではなく倫理的問題としてとらえる見解を表明したことには注目すべきであろう。しかし、やはりサン・ホアキン・ヴァレーの教会献金主である栽培業者はこのことを即座に州カトリック教会組織のストへの全面的支持の表明ととらえ、教会への怒りをあらわにしたのである。⁽²⁹⁾ドノホー司教の発言によれば、第二バチカン公会議の決議が州教会の以上の態度の変化に決定的な影響を与えているような印象を受けるが、本稿でこれまで州外からの諸宗派のストやボイコットへの働きかけの経過を見てくると、むしろ州外の教会関係者のカトリック教会に対する影響力の方がずっと大きかったと言える。プロテスタントの側からは、長老派教会牧師でCMM理事のハートマイヤーが陳述に立った。農業労働者の生活実態とデラノ・ストに関する個人的見解として、低賃金ゆえに季節労働者とその子供たちが受けている人間的苦しみが教会人やCMMに関わる少教派の教会関係者の持つべき中心課題であり、そうした苦しみの軽減は第一に農業労働者の組織化の成功如何にかかっている、と述

べた。⁽³⁰⁾

さらに、デラノのセント・ポールズ・バプティスト教会の主任司祭R・B・ムーア師を、経営者側の影響を受けた地元デラノのプロテスタント教会の見解の代弁者と見なすことができる。黒人である師は、ストを完全なる公民権運動と規定し、デラノにはもはや人種差別は存在しないことを強調してストは無意味であると批判した。

「計画立案委員会の議長として、市議会で働くメキシコ系がいる。警察署長がメキシコ系だしデラノにはそのもとで働くメキシコ系や黒人の警官がいる。今では、人種や経済的な地位が理由で、医師の診断を断られることもない。」と⁽³¹⁾

前述の六五年十一月中旬のシェンリー社へのピケの場面におけるように、デラノ・ストを公民権運動と同一視するのはスト反対側の半常套的な戦略となっていたと思われる。また、デラノ市民コミュニティ・リーグ(DCC L)というデラノ在住の四人の著名なメキシコ系によるスト反対組織も存在し⁽³²⁾、民族的な団結の粉碎を目指すスト反対側の戦略に対し、労働者側は、少数民族運動ではなく農業労働者運動としてのストのイメージを作りあ

げる必要があった。そのために、たとえば『エル・マルクリアード』六五年十二月二二日号⁽³³⁾に取り上げられているようなフィリピン系とメキシコ系の合同協議会を開催して一民族を越えた運動の姿を組合の内外に印象づけてはならなかったのである。

さて、州カトリック教会組織の支持が公式の場で表明され、神父たちの個人的な支援行動が以後、組織公認の行動と見なされる。一方、地元教区のカトリック教会の態度がスト支持に一変するのは、まだ先のことである。このように、州教会がストへの支持を表明する舞台となったのが公聴会であり、同様に三月十七日から始まる「サクラメントへの巡礼」が教会組織の支持表明に呼応する形でカトリックの教会関係者が続々とスト支援に仲間入りする場を提供することになる。

V サクラメントへの抗議行進

三月十七日から四月十日のイースター・サンデーにかけて、チャベスはメキシコ系、少数の黒人・アングロを含む七十五名を率い四教区出身の牧師を伴ってデラノから州都サクラメントまでの三百マイルを行進した。これ

は六五年の黒人を中心としたセルマ行進を真似たもので、イースター巡礼の性格も持っていた。しかし、その最大の目的は、秋の知事選に向けて運動を開始していたブラウン州知事(それまで政治的理由でストの問題を避けて通っていた)に圧力をかけストの調停を受諾させることであり、デラノ産葡萄全国ボーイコットを普及させる宣伝ともなった。『エル・マルクリアード』は、「この行進は『抗議行進』ではなく、神への我々の信仰、祖先の契約への我々の信頼、そして我々の目的に向けての熱意を主張するための巡礼である」と意味づけている。しかし、労働者の行進に宗教的なものを持ち込むのを疑問視する意見も参加者の中にあつたとの記録もあり、純粹なる巡礼と見なすのは統一された見解ではなかったようである。⁽³⁴⁾そこで、抗議運動の要素と巡礼の要素を兼備した行進という観点から、カトリックを中心とした聖職者の参加状況を見ていきたい。

行例の先頭にはメキシコ人民の輝かしき宗教シンボルとされるグアダルーベの聖母の幟が掲げられ、その両側には米墨両国旗が旗めいていた。また、ソンプレロと赤いボンチョを身に付けた巡礼者の大半は、メキシコ人の

祖先アステカ族の象徴である黒ワシを中央にイメージした、赤地に白丸のNFWA旗を掲げていた。⁽³⁵⁾

三月十九日、サンフランシスコ大司教T・マクガケンが三人の神父に翌日の行進に参加する権限を与えた。二日、サン・ノゼ在住のフライ師は、行進に日中参加した。二四日、大司教の私的代理人J・マッカーシー師が行進者たちのために祈禱した。また、ウィリンガー司教の公的代理人ネリー師、サンフランシスコのセント・パトリック神学校生、フランシスコ純心修道会出身ベイ・エリア在の修道女等が行進に参加した。⁽³⁶⁾行進が次第に加州北部に近づいていく初期の段階に、カトリック教会組織の比較的上位の聖職者たちが行進に肯定的な行動・態度を示すことで、教会のスト支持を明らかにしたのである。

行進に呼応する形で四月二日には、マサチューセッツ州ボストンで、「ボストン葡萄パーティー」を自称する約二百人の一団が州議事堂から港まで行進し、デラノ・ストを支持して大量の葡萄を海に投げ捨てた。これは、アメリカ独立革命を誘発した一七七三年十二月十六日のボストン茶会事件の明らかなる模倣で、デラノ・ストを

「現代のアメリカ革命」的な規模にまで拡大する役割を
持った行動と意味づけられていた。一方、巡礼の各逗留
地で朗読された声明文「自由への計画書」(the Plan of
Delano)では、冒頭にスト参加者のメキシコ人として
のルーツが語られるが、話の展開につれて、闘争の持つ
農業労働運動の性格や、米国民としての政治的権利の要
求や全国的連帯の主張が強くなる。また、行列の随所には
メキシコ国旗とともに星条旗が掲げられ、この農業労働
者運動が分難主義を指す運動では決してなく、あく
までも米国の労働者として農業労働者にNLR Aの適用
を認めてほしいと要求する運動として提示しようとする
意図が見られる。⁽³⁷⁾これは、しばしば労働運動が米国では
「コミュニストの仕業」と見なされて弾圧を受けてきた
従来の歴史を踏まえての、労働指導者側の用意周到な作
戦とも言えなくもない。それはまた、ストの持つ非暴力
の戦略とともに、米国一般大衆をスト側の味方につける
ための有効な手段でもあった。

さて、四月四日、州教育委員会の委員長で副州知事への
民主党推薦候補T・W・ブラッデンが翌日の行進に自ら
参加することを表明し、メソジスト教会のカリフォル

ニア・ネバタ協議会の代表者等が同じく参加予定である
ことを発表した。四日は、NFWAがシェンリー産業の
抱える主たる卸売店として、加州北部にあるジュリアー
ド・アルファ醸造会社にはピケを張った日でもあった。五
日には、州議会下院議員P・ソート(ロサンゼルス郡選
出、唯一のメキシコ系州議員)を代表として七人の州議
員団が、この日遅くサン・ホアキン郡ロディの南で行進
に加わる予定であった。⁽³⁸⁾

以上のような宗教的・政治的圧力に耐えかねたのか、
六日シェンリー産業はとうとうNFWAを自社の葡萄摘
み労働者(約四百五十人)の唯一の交渉仲介人と認める
ことに同意した。初めての打開に対し、NFWAは以下の
同意に基づいてシェンリーへのボイコットを即時中止
した。①NFWAはシェンリーの葡萄摘み労働者の交渉
仲介人となること、②シェンリーは労働契約人ではなく
NFWAを利用すること、③シェンリーは時給一ドル七
五セントを支払うこと。加えて、有給休暇と保険を含め
たフレンジベネフィット制・ユニオンショップ制も承
認された。⁽³⁹⁾

行進最終日の十日(イースター・サンデー)には、推

定八千人の大観衆の見守るなか、全行程を行進し終えた五十七人がサクラメント州会議事堂の階段を上っていった。遊歩道の群衆は涙を流しながら声援を送り、メキシコ国旗を盛んに振っていた。目的を果たしたチャベスは、記者・レポーター・テレビカメラに囲まれながら、シェンリーとの問題解決を報告し、次なる標的ディ・ジョルジオ製品の消費者 бойкот運動の宣言を改めてマスコミを通じて行ったのである。行進者にとっては残念なことに、州知事はスト問題と直面するのを避けるため家族とともに休暇旅行に出かけて不在であった。演壇でC・ハートマイヤー師は、群衆に向かってブラウン氏は間違っている、と明言した。「私たちの中にも、イースターの日に家族と一緒に過ごせたらよかったのと思っている人はたくさんいる。それでも、私たちはここにいるのだから。」⁽⁴⁹⁾

むすびにかえて

既に見たように、プロテスタントに比べ州レベルおよび地元司教区のカトリック教会のスト支持の行動が遅れた理由として次の三つが指摘できる。(一) ロサンゼルス

ス大司教区を中心としたカトリック教会組織によって今世紀初頭から掲げられていたメキシコ系に対する愛国^{II}同化主義的方针が、チカノ運動の標榜する反同化主義・反人種差別主義と対立していたこと。(二)「布教団」をめぐる事件で明らかだったように、農業労働者の組織化に対する栽培業者側の反発が凄まじかったこと。(三)地元のカトリック教会と農業労働者の関係は疎遠であったこと。

スト推進労働組合が以上の障害を除去してカトリック教会側から支援を勝ち取るには、自分たちの運動は教会の考える「過激な性格のもの」ではないがゆえに純粹に教会が関わるべき倫理的な問題に属するのだということを示さなくてはならなかったのである。労働者の間での非暴力主義の誓いとその実践は、運動のラディカルなイメージを払拭し、さらに聖職者のストの参加を促進した。スト支持に動きやすかったのはプロテスタントとユダヤの聖職者、州外部のカトリック聖職者で、特に後者からの様々なスト支援の行動が加州カトリック教会組織にストに対する姿勢を再考させる大きな要因になったといえる。六六年三月の司教による州教会組織の支持表明は公

の目には突然の行動のように見えたのであろうが、組合機関紙や地元紙という史料を通してカトリック聖職者のストに関わった大小の行動を追ってみると、司教の支持表明が唐突なものでは決してなく、外庄に対して熟慮を重ねたうえで最終的な決定であったことが読み取れる。もちろん、支持決定の口実となった面もあるが、第二バチカン公会議での決議事項が決定の指針になったことも否定できない。⁽⁴⁾

一方、巡礼行進においてチャベスが宗教色をつけた理由のひとつは、ストが経済的な問題というよりも倫理的な問題であることを強調したかったためと考えられる。つまり、ストを支持しないことは倫理性を理解しないことと位置づけたため、ストに参加する聖職者の数が段々と増加していき、そのことがまたストの宗教的色彩をさらに強めた。その結果、巡礼は数多くの人々の支持を集め、さらに重要なことにシェンリーの譲歩を引き出したのである。それは、「シェンリーが貧しい農業労働者の小集団を抑圧することに熱中している巨大組織であるという悪評に敏感であった」がゆえである。⁽⁴⁾

以上のように、州教会組織のスト支持の表明と行動を

引き出す要因となったいくつかの出来事は、単発的なものではなくそれぞれが互いに関連性をもって起こったことが本稿での論考を通して明らかとなった。カトリック教会はピケに参加した神父や州外のカトリック聖職者、他宗派の宗教組織からの働きかけによって徐々にスト支持の方向へ傾いていかざるを得なかったのである。それは、栽培業者や地元司教区の抵抗や反対をはねのけていく過程であったともいえる。

しかし、州教会組織がスト支持へ傾いたことは、すぐに地元周辺の教会の態度をも一変させたわけではなかった。巡礼が終了し、行進者たちがサクラメントからデラノに帰って来た時、同行した「外部の聖職者」たちはシェンリー産業との和解を祝う目的で町の公園にて野外ミサを行うことを提案した。ところが、デラノ東部のアングロの教区からの一団が次のような文句の看板を掲げてミサの開始を阻止しようとしたのである。「ミサを汚すな。」「このミサは司教が認めたものか。」「ミサが労働者のストライキとどういう関係があるのか。」アングロ教区の主任司祭もその一団の中にいて、計画された野外ミサを「ミサを冒瀆するもの」と呼んだ。結局、ミサは行

われなかった。⁽⁴³⁾

たしかに、その後デラノへの外部聖職者の訪問やスト参加者への外部教会指導者からの物質的な援助は増加したが、六六年の夏の時点でも地元司教区のウィリンガー司教はなおも中立の立場を堅持していたのである。⁽⁴⁴⁾ このように、地元にはストライキを支持しない勢力が、外部からのスト支援勢力に対峙する形で強固な存在を保っていたことになる。地元司教区が本格的にスト支持に移行するのは、六七年十二月のウィリンガー司教の辞任に伴うマニング司教の就任を待たなくてはならないのである。

(1) NFWAの機関誌で隔週発行されていた *El Maltrato* (本文では『エル・マルクリアード』とした)の六五年九月三〇日号には、チャベスの公開状が掲載されている。これはデラノ・ストを開始するにあたり対象となる経営者らに送られた書状で、そこに盛り込まれた要求の内容は、(i)賃上げの実施(時給を一ドル二〇セントから一ドル四〇セントにすること、葡萄一箱に対する能力給を十セントから二五セントに引き上げること)、(ii)労働時間をはじめとする労働環境の改善、(iii)(i)と(ii)に関する労働協約について労使間で交渉の場を持つことであった。スト発生に関する詳細は、拙稿「ディレーノ・ストライキとチカーノのアイデンティティ」『アメリカ研究』

第二十六号、一九九二年、を参照願いたい。

(2) Patrick H. McNamara, "Bishops, Priests and Prophecy: A Study in the Sociology of Protest," Ph.D. dissertation, UCLA, 1968.

(3) *Ibid.*, pp. 138~42.

(4) William G. Jeffs, "The Roots of the Delano Grape Strike," Master's thesis, California State College at Fullerton, June, p. 115.

(5) Patrick H. McNamara, "Catholicism, Assimilation, and the Chicano Movement: Los Angeles as a Case Study," in Rudolph O. de la Garza et al. (eds.) *Chicanos and Native Americans: The Territorial Minorities*, Prentice-Hall, 1973, pp. 126~7.

(6) *Ibid.*, pp. 126~30.

(7) *Ibid.*, p. 127.

(8) 「移動労働者担当牧師団」の誕生と歴史的変遷、そしてデラノ・ストライキの現場での役割については、拙稿「メキシコ系とフィリピン系の農業労働者ストライキにおける聖職者——プロテスタントによる早期支援のルーツをめぐって——」『アメリカ史研究』第十六号、一九九三年を参照願いたい。

(9) Joan London and Henry Anderson, *So Shall Ye Reap*, N. Y.: Crowell, 1970, pp. 85~94.; Moises Sandoval (foreworded by Bishop Ricardo Ramirez), *On the Move: A History of the Hispanic Church in the United*

States, Orbis Books, Marynoll, N. Y., 1990, p. 97. Sandoval は「布教団」にならったカトリック神父による奉仕活動の形態がテキサスをはじめとする他の地域にも後に見られるようになったことを指摘している。

- (10) John G. Dunne, *Delano*, Farrar, Straus & Giroux, New York, 1971 (1966), p. 82; Matt S. Meier & Feliciano Rivera, *The Chicanos: A History of Mexican Americans*, Hill and Wang, N. Y., 1972, p. 263; Lawrence J. Mosqueda, *Chicanos, Catholicism and Political Ideology*, University Press of America, Inc., 1986, pp. 118~9.
- (11) 七十年代末において、全米カトリック人口の約四分の一、米国西部カトリック人口の三分の一以上を占めるメキシコ系が、神父としては二〇〇人以下（全米で五八、三〇一人の神父）しかおらず、また七十年になって初めてメキシコ系の司教が登場した。比較として、七十年代末で全米カトリック人口のうち十七％のイールランド系が神父の三三・五％、上位聖職者の五十％を占めつつあった。 (Antonio R. Soto, "The Church in California and the Chicano: A Sociological Analysis," *Grito del sol* 4 (Book One), p. 50.)
- (12) McNamara, "Bishops," p. 142; Mosqueda, p. 120. ハーリッブ・ペリマン『解放の神学とラテンアメリカ』（後藤政子訳）、同文館、一九八九年、三九頁、八六―八九頁。
- (13) *El Malcriado* 23 (Nov. 10, 1965), 24 (Nov. 24, 1965); Alice Ogle "Revolution in the Vineyard," *Ameri-*
ca, Dec. 11, 1965, pp. 747~8.
- (14) *El Malcriado* 23; Charles A. McCarthy "Diary of a Grape Struck," *Ave Maria*, 103 (Jan. 15, 1966), pp. 19~22. チャーチー神父は六十年前後から全米規模のノーマロ計画撤廃運動の推進者として活躍し、カリフォルニア神父会十一年間農業労働者をめぐる経験がある。
- (15) *El Malcriado* 22 (Nov. 27, 1965), 23, 26 (Dec. 22, 1965); McNamara, "Bishops," pp. 138~40.
- (16) *El Malcriado* 27 (Jan. 11, 1966); *Farm Labor* Vol. IV, No. 1 (Feb., 1966), p. 12.
- (17) National Advisory Committee on Farm Labor (NACFL), *The Grape Strike*, N. Y., February, 1966, p. 23.
- (18) *Ibid.*, p. 24; *El Malcriado* 24, 25 (Dec. 8, 1965); *San Francisco Chronicle*, Nov. 18, 1965; *Bakersfield Californian*, Nov. 18/Nov. 29, 1965; *Fresno Bee*, Nov. 29, 1965.
- (19) Dunne, p. 128; J. C. Jenkins, *The Politics of Insurgency: The Farm Worker Movement in the 1960s*, Columbia University Press, New York, 1985, p. 153; Sam Kushner, *Long Road to Delano*, International Publishers Co., Inc., 1975, p. 153; Jean M. Pitrone, *Chavez: Man of the Migrants*, Alba House, New York, 1972, p. 70.
- (20) Dunne, pp. 128~30; Jenkins, pp. 152~3; Linda C. Majka & Theo J. Majka, *Farm Workers, Agribusiness, and the State*, Temple University Press, Philadelphia,

- 1982, p. 178; Meier & Rivera, 1972, p. 256; "The Little Strike that Grew to La Causa," *Time* 94 (July 4, 1967), p. 46; 斎藤真世の追憶『トメニカを知り事』半沢社 一九八六年 一三三〇頁。
- (12) Dunne, p. 127; NACFL, p. 10.
- (22) *El Malcriado* 27, 28 (Jan. 26, 1966), 29 (Feb. 12, 1966).
- (23) *El Malcriado* 30 (Feb. 28, 1966), 31 (Mar. 17, 1966).
- (24) *El Malcriado* 28, 29.
- (25) Jenkins, pp. 153~4; Committee on Labor and Public Welfare, Subcommittee on Labor, *Amending Migratory Labor Laws*, Hearing on S. 1864—1868, July, 1965 and March-April, 1966, 89th Cong., 1st and 2nd Sess., 1966, IV, V.; *El Malcriado* 31; *Farm Labor* Vol. IV, No. 3, April, 1966, p. 7.
- (26) Jenkins, p. 154.
- (27) Committee on Labor and Public Welfare, p. 631.
- (28) *Ibid.*, p. 632; *San Francisco Chronicle*, March 17, 1966.
- (29) Jenkins, p. 154.
- (30) Committee on Labor on Labor and Public Welfare, pp. 668~70.
- (31) *Ibid.*, p. 697.
- (32) *El Malcriado* 24.
- (33) *El Malcriado* 26.
- (34) *El Malcriado* 31; Pat Hoffman, *Ministry of the Dispossessed: Learning from the Farm Worker Movement*, L. A.: Wallace Press, 1987, p. 36.
- (35) Meier & Rivera, pp. 265~6; *Sacramento Bee*, March 25, 1966; Ronald B. Taylor, *Chavez and the Farm Workers*, Boston: Beacon Press, 1975, p. 171; Luis M. Valdez, "The Tale of the Raza" in "Huelgal Tales of the Revolution," *Ramparts* 5 (July, 1966), pp. 40~3.
- (36) *Sacramento Bee*, March 20/March 25, 1966; *Los Angeles Times*, March 22, 1966; *National Catholic Reporter*, April 6, 1966.
- (37) *The New York Times*, April 3, 1966; Taylor, p. 174; *El Malcriado* 27; Dunne, pp. 133~4; "The Plan of Delano," *Catholic Mind* 64 (June, 1966), pp. 20~22.
- (38) *Los Angeles Times*, April 5, 1966; *Sacramento Bee*, April 5/April 6, 1966.
- (39) *Los Angeles Times*, April 6, 1966; Meier & Rivera, pp. 265~6; NACFL, p. 53; *Time*, p. 18; Pitone, p. 96.
- (40) Dunne, pp. 134~5; Jenkins, p. 156; Kushner, p. 155; Mark Day, *Forty Acres: Cesar Chavez and the Farm Workers*, New York: Praeger, 1977, p. 42.
- (41) 教会の内部資料を手に入れることができないため、フォーマルな意思決定機構の中で教会の方針転換がいかなる形で処理されていたのかについて資料で裏付けることは

(113) 1960年代のカリフォルニア州における農業労働者ストライキと教会

現状では不可能である。

(42) Majka & Majka, p. 178.

(43) McNamara, "Bishops," pp. 144~5.

(44) *Ibid.*, p. 142~3.

(一 橋大学大学院博士課程)